▼書評

竹本真希子著『ドイツの平和主義と平和運動

(法律文化社、二○一七年一月、二五八頁、五三○○円+税──ヴァイマル共和国期から1980年代まで』

田中ひかる

はじめに

1

課題のひとつである。

「そもそも第二次世界大戦以前にドイツに平和運動など存在したの「そもそも第二次世界大戦以前にドイツに平和運動など存在したのか」。このような疑問が提起されることがあるだけでなく、「あのナが」。このような疑問が提起されることがあるという。それは、戦前のかとつである。

本書は、著者による研究の集大成であるが、そういった普遍的な課題本書は、著者による研究の集大成であるが、そういった普遍的な課題本書は、著者による研究の集大成であるが、そういった普遍的な課題本書は、著者による研究の集大成であるが、そういった普遍的な課題を引きてはオシエツキーの名前があげられていたことが記憶に新しい。

義・平和運動は、アクチュアルな対象である。そのような意味で、本書が扱うオシエツキーとヴァイマル期の平和主

い タイプの相対化に貢献することができたであろうか。以下で見ていきた また、そのことを通じて、冒頭に掲げた「ドイツ人」に関するステレオ な評価に対して、本書は新たな視点を提起することができただろうか。 批判し、総じて、ヴァイマル共和国時代とナチ時代を知っていて、 ネ』(WB)、『ターゲ・ブーフ』(TB)、その執筆者や編集者について の歴史として扱われてきた。それにもかかわらず、本書が扱うヴァイマ 人およびWBやTBが厳しく批判されてきた。このような従来の否定的 かつ戦後ドイツで活躍した知識人たちからは、オシエツキーら左派知識 マンはWBの編集者であるオシエツキーが「不公正で不正確」、ハン ル期の左派知識人や彼らが言論活動を展開した雑誌 ス・ウルリヒ・ヴェーラーはWBについて「共和国を弱体化させた」と 著者によれば、本書で扱われるヴァイマル期の平和運動は、 一九六○年代から研究が蓄積されてきている。ところが、 『ヴェルト・ビュー ゴーロ 「失敗

2 本書の構成・目的・内容

本書の構成を見ると、第一章「ヴァイマル知識人の思想としての平和本書の構成を見ると、第一章「ヴァイマル共和国期の平和主義・平和運動を提示から一九八○年代までの時期もカバーしているため、結果的には、約の三分の二を占めている。ただし、帝政期および第二次世界大戦終了の三分の二を占めている。ただし、帝政期および第二次世界大戦終了本書の構成を見ると、第一章「ヴァイマル知識人の思想としての平和本書の構成を見ると、第一章「ヴァイマル知識人の思想としての平和

持ったのかを考える、という目的が掲げられている る、二〇世紀のドイツにとって平和運動と平和主義がどのような意味を イツの平和運動とヴァイマル共和国期の運動との「違い」を明らかにす 年代における平和運動の課題を明らかにする、第二次世界大戦後の西ド 究極的な目的であるということが読み取れる。また序章では、一九二〇 未来における平和に対する私たちの向き合い方を考えることが、本書の 合っていくかを考察することが可能になる」と述べられており、現在と たのか」を検討することで、「現在の平和の問題に我々が日々どう向き 「はじめに」では、「平和に関する言説や活動はどのように変化してき

平和運動は大衆動員を目指す運動に転換し、また、Pazifismus や Pazifis 国におけるアウトサイダー」だったと述べている。 なく、著者は、第一章で扱うような様々な平和運動が 派から革命的平和主義といった多様な潮流に分かれた。一九二一年には 想、人道主義的平和主義、反軍国主義、反帝国主義が混ざり合い、穏健 という語が積極的に使われるようになるとともに、平和主義は、啓蒙思 主党による社会主義者を中心とする運動があった。第一次世界大戦後、 者やドイツ平和協会といった組織によるエリート中心の運動と、社会民 いる。第一次世界大戦前は、ベルタ・フォン・ズットナーら平和主義 るまでのドイツにおける平和主義および平和主義運動全体が検討されて 「戦争はもうごめん」をスローガンにした大規模な集会を成功されてい 第一章では、第二帝政期から第一次世界大戦を経てヴァイマル期に至 しかしながら、「平和」を政策として掲げて国政に参加する政党は 「ヴァイマル共和

とドイツの加盟、 和主義者たちによる多岐にわたる議論が検討されている。 続く第二章は、ヴァイマル期における国際的な平和を実現する上で平 国際連盟によるドイツに対する制裁措置、 国際連盟設立 さらにドイ

> か、 説に基づいて分析されている。 様々な外交問題をめぐる議論が、 うに評価するか、あるいは、ソ連・ポーランド・アジアの情勢といった ツの常任理事国入り、パリ不戦条約、憲法に戦争禁止条項を設けるか否 ヨーロッパ統合を通じた平和構築、シュトレーゼマン外交をどのよ WBやTBに掲載されたいくつかの論

動と現在について言及され、 ドイツにおける平和運動が扱われている。ここでは戦前と戦後の平和主 する彼らの抵抗、さらに、ナチ政権獲得以降のオシエツキーに対する弾 運動に関する総括がなされている。 る。終章では、ドイツの平和運動の変化、ヴァイマル共和国期の平和運 義・平和運動との「断絶」、および戦後からの「再開」が検討されて ている。続く第四章では、第二次世界大戦後から一九八○年代までの西 圧および救援活動、そしてノーベル平和賞受賞までの経緯が検討され る点について述べていきたい。 第三章では、ヴァイマル期の平和主義者に対する言論弾圧とそれ ヴァイマル時代の知識人の平和主義・平和 以下では、評者が本書の成果と考え に対

3 本書の成果

パ規模での国家連合組織といった、 関して日本語で読める唯一の書物であり、本書は極めて貴重かつ重要 らかされ、第二章からは、 者の知る限りでは、日本では先行研究がほとんど存在せず、この領域に な研究である。また、 「平和運動」という概念や用語に一括できない多様性があったことが明 本書が扱うヴァイマル共和国期の平和主義と平和運動に関しては、 第一 一九二〇年代に、国際連盟あるいはヨーロッ 章では、ヴァイマル期における 国際組織を通じた戦争の未然防止

に貴重であるのか、という点に気づかされる。

平和の維持が、平和主義者たちにとって重要な論点となっていた、といっことがわかる。逆に、極めて不十分であり、問題を多く含んた、ということがわかる。逆に、極めて不十分であり、問題を多く含んた、ということがわかる。逆に、極めて不十分であり、問題を多く含んた、というなはいえ、現代世界における平和運動の前提になっている国連を中心とする紛争解決が、平和主義者たちにとって重要な論点となっていた、とい平和の維持が、平和主義者たちにとって重要な論点となっていた、とい

他方、第三章では、ヴァイマル共和国が民主主義的な国家であったに他方、第三章では、ヴァイマル共和国が民主主義的な国家であったにまの功績ではないかと評者は考える。

た彼らの生き方から学ぶことは多い。以上指摘した点が本書の重要な成題を、今日にとは比べられないほど困難な状況で考え続け、議論し続け事二次世界大戦の勃発を阻止する以前に、平和主義運動全体が分裂・崩壊した。著者によれば、こういった経緯について「失敗」という評価が壊した。著者によれば、こういった経緯について「失敗」という評価が国を、今日にとは比べられないほど困難な状況で考え続け、議論し続けるのが、平和主義者たちの目標であった。しかし、ナチの政権獲得と国防軍や保守派を押し返して民主的な社会をつくり、国際平和を実現

果であるが、以下では、本書に見られる問題点について見ていきたい。

・本書の問題点

の世代との間の思想的・運動的な継承関係を否定的に捉えている。 という点に「違い」を見いだすことができると指摘する 動が大衆の啓蒙と動員をしなかったが、 イマル期との間にある、 が本書に見られる第一の問題点である。 大戦後、という各時代における平和主義・平和運動に見られる「違い」 「断絶」「失敗」を指摘する一方、 本書全体を通じて著者は、 運動に関する「断絶」を見いだし、 帝政期、 人的・運動的連続性や前の世代とあと ヴァイマル共和国期、 ヴァイマル期には動員をした、 たとえば著者は、帝政期とヴァ 帝政期の運 第

ついて再検討すべきではないだろうか。

一定の戦争や平和に対する態度や行動の実態を踏まえた上で、「断絶」に実行できなくても意識されていたのではないだろうか。ドイツ社会で広実行できなくても意識されていたのではないだろうか。ドイツ社会で広まできなが、帝政期の社会主義者たちは、戦争を阻止するために大衆啓蒙やだが、帝政期の社会主義者たちは、戦争を阻止するために大衆啓蒙や

「戦争はもうごめん」といった第一次世界大戦直後にあらわれたスローティン・ニーメラーなどを挙げることができる。また、「兵士は殺人者」期から戦後にかけての人的な連続性の例としてハンス・パーシェやマル期から戦後にかけての人的な連続性に気づかされる。たとえば、第二帝政主義・平和運動の連続性や継続性に気づかされる。たとえば、第二帝政主際、先述したように、本書を通読すれば、著者が強調する「断絶」

3

視点を持つ。そういった視点を提示する彼らが、未来を見通していた や少数派は、その社会から距離をとっているため多数派と異なる独自の どこにあるのか、という点について何も述べていない。アウトサイダー サイダーであったと強調する一方、 能性を検討していない。 義者たちを、政治的な影響力がなかったという意味で、少数派でアウト 無意識に受け入れているからではないだろうか。例えば著者は、 ガンが今日に至るまでの平和運動でも使われてきたとも指摘されている。 「予言者」であった、という可能性もある。 著者が「断絶」ばかりを強調するのは、 彼らの思考や行動を研究する意義が 「失敗」という従来の評価を しかし著者はそのような可 平和主

きたのか、という問題があるのではないか、と評者は考える 研究が依拠した分析の枠組みを著者がどこまで批判的に捉えることがで いて、著者が検討していない、という問題である。言い換えれば、先行 ツキーの名前を冠するまでになった、という評価の変容とその要因につ オシエツキーらに関する地道な研究が続けられ、今日では大学にオシエ らに対する批判や否定的な評価が生まれた要因や、一九六○年代以降、 以上の点と関連して指摘できるのは、 先行研究におけるオシエツキー

妻モードがインド系イギリス人であった、といった事実は、 ショナルな枠組みで分析可能である。 運動が、フランスやイギリスでも広がった、 カやイギリスの兵役拒否者を理想とした、「戦争はもうごめん」という 稿者はドイツ人だけではなかった、ヘレーネ・シュテッカーが、 BやTBが南北アメリカの国々でも入手できた、ということ、TBの寄 においてトランスナショナルな視点が弱い、という点である。 分析の枠組みの問題としてもう一つ指摘できるとすれば、それは本書 あるいは、オシエツキーの トランスナ 例えばW アメリ

> ちについても記載されているが、彼女たちの行動や見解に関する分析は られない、という点を指摘できる。例えば、本書で取り上げられる平和 ほとんどない。 主義者のほとんどが男性である。 欠落として、ジェンダーに関わる論点を意識した議論や分析が本書で見 そもそも平和運動は、一国史の枠組みでは読み解けないのであるか 一以上指摘したような点は、本書における重大な欠落である。 平和主義・平和運動に関わった女性た

根拠が提示されていないが故に不明確である。 けではない。したがって、著者が強調する「平和主義」の特徴や内実は を保障する国家、という問題と関わっていたといった指摘がある。 ていた「平和」という概念が、個人と国家との関係、 しながら、著者はそのような具体的な主張を取り上げて分析しているわ た問題が平和主義者たちにとって重要であった、あるいは、 さらに、「終章」では、教育・文化・自由 ・平等・人権の擁護とい 個人の生きる権利 彼らが考え

検討すべきだったのではないか。 の議論に見られる「人間中心主義」 動物は、 動物」ではなく、「理性」を持った「人間」であるから戦争をしない、 える上でどのような意味を持ったのか。 といった考え方を背景にしてるように読み取れる。しかし、 ていない箇所が多い。たとえば、「理性と道徳的感情に訴えることによ にすることである」という主張が引用されている。この言葉は、「肉食 って、盲目的な行動存在と二本足の肉食動物という状態から本当 加えて、平和主義者の主張が引用されていても、 敵対勢力の無差別・大量殺戮を続けるようなことはしない。こ は、 著者はこのような点についても 「平和」という当時の概念を考 十分に分析がなされ 人間以外の

5 おわりに

史・近現代史などを学ぶすべての読者に本書を推薦したい。 上のような理由から評者は、 った、という点が指摘されている点も、 ーらの考えていた「平和」が、今日の積極的平和主義に通じるものであ 書の重要な成果である。さらに、不十分であるとは言え、オシエツキ わたる議論を展開していた、といったことを明らかにしていることも本 困難な状況の中で平和主義者たちが国際的な平和の維持について多岐に したように、ヴァイマル期の平和主義・平和運動の多様性、あるいは、 書において詳細に描かれているからである。それ以外にも、すでに指摘 和」について議論し続けたヴァイマル共和国期の平和主義者の姿が、本 にもかかわらず、厳しい弾圧があっても言論活動をやめることなく「平 からであり、また、アウトサイダー・少数派という立場におかれていた って持続的に展開されてきた、ということが本書で明らかにされている 割を果たすであろう。それは、ドイツの平和運動が一○○年以上にわた を生み出したドイツ人」というステレオタイプを克服する上で重要な役 した問題、 以上のように、様々な問題が指摘できるとはいえ、本書は冒頭で提起 すなわち、「ドイツに平和運動など存在したのか」「あのナチ ドイツ史・ヴァイマル共和国史・平和運動 本書の重要な成果であろう。以

(たなか ひかる・明治大学教授)